

立命館大学建設会

発行所
立命館大学建設会事務局
〒525-8577
滋賀県草津市野路東1-1-1
立命館大学理工学部
環境都市系事務室内
平成 24 年 8 月

第26号

会長挨拶

建設会会長

川那部 隆二

昭和四十八年卒



会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。月日の立つのは早いもので、一昨年十月の総会で重責を仰せつかったから、早、二年目となり、今年も隔年に開催しております総会の年となりました。皆さん方のご支援・ご協力によりまして、なんとか無事努めさせていただいております。深く感謝する次第でございます。

同意を受けて、大飯原発三、四号機の再稼働が決定されました。いいまでも、フル出力は七月の下旬以降になるとのこと、微々たるものではあります。家庭においても節電に努め、なんとか計画停電など実施されることなく、この夏が乗り切れるよう祈っております。

この原稿を書いておりますのは、六月中旬ですが、これからの暑い季節を迎えるにあたり、電力不足が大変懸念されております。特に十五%の電力が不足すると言われる関西圏を中心に、原子力発電所の再稼働の是非について論議が繰り返されておりましたが、過日の福井県の

よりお招きをいただき、各地の支部総会に出席させていただいておりますが、いずこの支部も、会の活性化というのが課題となっているように感じております。活性化にもっとも資するのは、やはり「一人でもたくさん」の会員が参加して「くれること」なのですが、例年

参加する人は同じような顔ぶれとなり、一昔前から比べると参加者数は半減している、というのが共通する悩みであります。こうしたことから、各支部とも、特に若い会員の参加を募るため、若年層の幹事を増やしたり、卒業年次に応じて会費を割引したりと、さまざまな取り組みをさせていただいております。

私、昨年、そして今年と、建設会学生会主催の、環境都市系卒業記念パーティーに出席させていただきました。三百名くらいは卒業生が参加されているとのことでしたが、皆さん本当に元気で会場は熱気に溢れていました。この元気な人材が社会に出て、この元気で、いつまでも活躍してくれることを願うとともに、この若々しいパワーの新鮮な息吹を、建設会にも吹き込んで欲しいと心から思いました。

建設会の大きな利点は、年代を超えたつながりにあると思っております。私の経験から申し上げます、仕事の関係で名刺を交換したときも、勉強している学生は、「勉強せい」と言われて勉強するものではない。大先輩方は、こうした摂理をよくご承知のうえで、学生たちに大切なことを伝えようとされているのである。本当にありがたいことである。いつも心から感謝しております。

お詫びと言いつつのご挨拶

環境都市学系 学系長

環境システム工学科

中島 淳 教授



在学中の早い時期から学生諸君に進路を考える自覚を促すために、卒業された先輩方をお招きして、仕事や就職に関連したお話をいただいた。学生諸君は熱心に話に聞き入り、質問も多い。たいへん効果的でよい機会といえる。ご協力いただいた建設会の皆様には、まずお礼を申し上げます。ところで、先

い」という指導方針なのである。ここに、好々爺の先輩が笑顔でくだんのことを言われると、学生がその気になってしまつて困るというのである。

だつての就職関係の会議のことだが、卒業生でとくにご年配の方に多いのだが、「大学時代は全然勉強しなかつたが、いよいよだ」と言われるのはいさばん困る、という話が事務の方から出された。昨今の就職状況では、基礎学力の有無がますます重視され、就職サイドでも、「大学ではしっかりと勉強せ

ここで、まずお詫び申し上げるのは、その時の私の反応である。即座に顔色を変えて、尊敬する好々爺でなく大先輩方の弁護をすべきであった。大先輩方に対して失敬な。大先輩方がおっしゃりたいことは言葉どおりのことではなく、深い含蓄がおりなのだ。と怒るべきであった。しかしながら、すべきことができず、私のとつた態度は恥ずべきものであった。口元を緩めて、無言でうなずいていたのである。ああ、なんたる不敬。

きや、職場に客として見えたときに、「立命の〇〇年卒です」と挨拶されると、なんとなく親しみを感じるのである。同窓とは思議なもので、初対面の間柄であつても、母校を介して百年の知己となることも、珍しいことではございません。同級生との横の繋がりはもちろんですが、年代を超えた同窓生としての絆が、より強くなつて、縦の繋がりにおいても、さらに交流の輪が広がる

建設会には、全国各地で、いろいろな要職に就き、活躍されている素晴らしい仲間がたくさんおられます。そして、毎年、元気な人材が入つてこられます。会員が一堂に会する建設会や各支部の総会は、同じ大学を卒業した先輩、後輩として、お互いの情報を交換できる絶好の機会であるとともに、まさに『築土構木』、土木の本質であります。『もぐりの喜び』を伝え、伝えられていく、良き機会であります。そして、そうした場であることが、

海外で働ける人づくりもそのひとつだ。この課題は、今後の環境建設系で求められる重要な使命と認識している。実際に卒業生からも、研修はドバイでしたとか、今度の勤務はダーバンですとか伝わってくる。「海外で働けますね」といわれて、「もちろんです」と即座に返えられる学生を増やさねばならない。そのために、夏期や春期休暇を利用した十日間程度の「海外環境スタデイ」を始めた。まず、中国、ベトナム、タイ、カナダに学部生を連れてゆくこととしたところ、二〇〇九年度〜二〇一一年度の三年間の延べ参加者数は、建築都市デザイン学科と環境システム工学科の合計で七十一名となった。二〇一二年夏期のカナダ(十五名)、中国(十五名)を加えると、百名を超えることになる。現地での見学場所は、カウインターパート大学、自然環境、都市インフラ施設、歴史的建築・街並み、処理施設、処分場、製造工場、文化施設、研究施設など広範だが、環境建設系の仕事の関連する現場・施設

若い皆さんの参加意欲を促し、情報交換、ひいては人脈形成の貴重な場として、賑やかな、元気のある建設会に結びついていくんじゃないかと思っております。

人生訓でよく「出る杭は打たれる」といいますが、「出すぎた杭」は打つことができません。若い後輩たちが、すくすくと出すぎた杭になつて、社会で活躍できる、そんな環境を建設会が創れたらなあ、と、そして、そんな建設会であることが、母校への貢献にもつながるんじゃないかと期待している次第です。

冒頭にも申し上げましたが、今年も二年に一度の総会の年でもあります。年代を超えた会員同士が、深い「絆」のもと一堂に会し、大いに語り合つていただきたいと思います。例年にもまして、より多くの会員のご出席を心よりお待ちしております。

最後になりましたが、建設会発展のため、皆様方の一層のご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

心掛けています。建設会の先輩方におかれては、後輩の学生諸君に見せたい海外現場をご紹介いただき、彼らの国際感覚・素養の育成にご援助・ご協力をお願いしたい。ぜひ、学系までご一報下さい。

本年度は大勢の新任教員に恵まれた。うれしいことである。都市システム工学科では、岡井有佳准教授、川崎佑磨助教、林倫子助教、藤本将光助教、環境システム工学科では、塩見康博講師、建築都市デザイン学科では、持田泰秀教授、堀口徹准教授、吉富信太准教授、さらに基礎教育(数学)として平岡由夫講師を学系にお迎えした。そしてご退職は、都市システム工学科のわれらが、尼崎省二教授と水田真紀助教、そして建築都市デザイン学科の張景耀講師であった。尼崎先生の立命館および建設会への貢献ははかり知れず、今後も建設会のご指導ご活躍を、そして後輩の育成をよろしくお願ひする次第であります。

会員の声

退職して五年を経て



岐阜県建設会
野村利樹
昭和三十五年卒

伊勢湾台風翌年の昭和三十五年卒業後、建設会社に土木技術者として就職し、約半世紀勤務し五年前に退職しました。

現在は、自治会長をおおせつかり四年弱経過しましたが、在職中は会社の業務に追われて、家庭のことも地域のこととは、家内に任せて何もわかりませんでした。最近では町内の人たちのつながりが出来、地域のことと少し分かるようになり、老骨に鞭を打ちボランティア活動にはげんでいる状況です。

在職中の思い出として、これから台風時期を迎えますが、昭和五十一年九月十一日の大型台風十七号の長時間の豪雨による鶴飼で有名な長良川が決壊した時、私は、当時建設省工事事務所より一級河川牧田川の水防を依頼され、堤防の決壊を防ぐため、現場で数日昼夜水防活動にあたっておりました。

堤防の決壊は、河川の水の上昇による水圧により、堤防外側の田面に「がま」ができ、田面から井戸水の様から崩壊していく状況を見る体験をしました。災害は忘れたころに来るとよく言われますが、阪神大震災から十七年経ち、昨年三月十一日の東日本大震災では、非常に悲しいこととなく皆さんの生命、財産を失う結果となりました。

私の地域でも、過去明治二十四

年十月二十八日(一八九二年)に濃尾大震災が発生しており、死傷者二十万人弱、家屋倒壊・半壊は約二十万軒との記録があります。また、水害については木曾川・長良川・揖斐川と大きな一級河川があり、江戸時代岐阜県西濃南部一帯の下流は毎年水害に悩まされ、海抜ゼロ地帯である濃・勢・尾州の低湿地帯を改良するため宝暦三年(一七五三年)に江戸幕府は薩摩藩に命じ治水工事が行われ、薩摩藩財政を圧迫するよう多大な工事費を費やし、多数の薩摩藩士の犠牲によって治水工事が行われた歴史があり、毎年四月二十五日と十一月二十五日に鹿兒島県の人たちはむろんのこと、多方面から参拝客が来られて、長良川河口堰上流にある治水神社で大祭が行われています。

私共地域では最近高齢化が進み、七十七歳以上の住民が約二十五%以上占める状況で、私の住んでいる土地は大きな地震が発生しますと液化化が起きる可能性が高いと言われて、有事の際に如何に対処するかの話などを土木技術者として経験したことを交えて、集会などで、皆さんに共助の精神で防災・減災についての話をし、生命・財産を守り住みよい街づくりの協力をお願いしています。

岐阜県建設会の設立に当たって、まだ私が勤務している時に、建設会司見前会長と竹中土木に勤務されてお



られる江間氏(昭和四十五年卒)両名の方が会社に来られ、立命館大学建設会岐阜支部の設立に協力をしてほしい旨のお話があり、特に県職員OBの皆さん方のご協力により、平成十九年十月に設立し、私が初代の会長をおおせつかり一年間皆様方に支えられ務めさせていただきました。毎年十月に総会を開催しており、学校からは先生・校友会関係の方々、また近隣の愛知・三重等の建設会会長様をご来賓としてお迎えし、また他学部の卒業生方も出席して頂いておりますが、現在は出席者が三十名の出席を得て、岐阜県建設会が益々の発展することを願っています。

中山道あればこそ



愛知県衣笠会顧問
可児幸彦
昭和四十二年卒

愛知県衣笠会発足以来、総会のほか各種イベントにほとんど参加した。多分それが理由と思われるが、中山道について書け、という天の声が届いた。ここ十数年、埋込杭工法、土留壁工法、PC壁体工法などの研究を重ねた私がなぜ中山道なのか、歴史をやるにはそれなりの訳があった。簡単にその辺について述べてみたい。

歴史に関心が有り相当の見識を持ちながら、周辺からの理解もあまり得られていないさそうで、足踏みを余儀なくされている同窓の先輩に出会った。彼には多くの著書があり見せてもらったが、私にはよく理解できなかった。

理解できないのは私に歴史的知識がなく、情報に乏しいからだと感じた。わかる方法はないかと思索していたところ、各務原市の広報誌で中山道鶴沼宿ボランティアガイド募集を知った。四年前のちょうど今頃である。早速申し込んだ。少しでも歴史に近づこうと、ガイドの勉強に夢中となった。あつという間に一年が過ぎ、ガイドの会に組織ができ、その副会長となった。

これだけの本を書いている人は学

位取得の道へ誘うべしとの信念で、歴史情報を嗅ぎ出そうと片っ端から読み漁っていた。そこへ、ノーベル賞情報と同時に、素粒子、ニュートリノなどの宇宙にかかわる情報が飛び込んできた。すべての情報が歴史にかかわるものと思えた。

銀河系が百三十七億年、太陽系は五十億年、地球は四十六億年の歴史を持ち、地表では、生命誕生から四十億年、この間三回、完全凍結時代を経てることなどの話題が面白く夢中になった。加えて、各務原市には、五万年前に木曾川上流の御嶽山を出発し、流れついた十億立米の木曾川泥流堆積物が露頭しているという情報を得た。どの歴史的知見も新鮮で面白かった。

我が家からガイド活動を行う歴史民俗資料館まで徒歩で、約一時間七千歩程度である。露頭している泥流についての詳細はわからないが、角礫は特徴的であり、ガイドに出かける途中、これらを見かけることが多かった。次第に通る道を変え、見かけた場所を記録するようになった。

この得られた分布範囲は各務原資料館便りに掲載され、地盤工学会中部支部の主催する第二十一回調査設計施工報告会でも発表された。

こうして、中山道鶴沼宿ボランティアガイドも土木史の一端を担おうとしている。今では、学位を取得された中根洋治博士(四十一卒)、奥田昌男博士(同)と筆者(四十二卒)の三人で土木史グループを結成・活動している。また、各務原市歴史民俗資料館学芸員(考古学)の協力を得ながら、中山道鶴沼宿発の新たな情報提供ができる日を夢見ている。冒頭のなぜ中山道か、私にとって知らないことばかりの歴史、好きになり夢中になれば足元照らす日々の出会いあり、中山道あればこそと思う。

さて、私の出身は山梨県甲府市です。最近の若者の中には何県がどこにあるか分からない人がいるらしいが、フルーツが豊富で、山が綺麗で、温泉があちこちに湧き出している自然がいっぱいいるところで、日本列島のほぼ中央に位置します。しかしながら最近では、リニア新幹線、中部横断自動車道の大規模土木工事が、バリバリ進められていることは皆様ご存知かと思えます。(環境保護対策はしっかりとやっています)

リニアの完成は二〇四七年、私たちがちょうど八十歳の節目のときですが、はたしてリニアに乗って京都へいけるか、そう遠くない夢です。東海道新幹線の開業が一九六四年、甲府(静岡)京都で六時間かかったと思えます。そしてこの修学旅行が立命館を目指すきっかけとなり、その後四年間しっかりと遊ばせていただきましたことを、いまさらながら感謝しております。今なら京都まで三時間半、リニア開通の暁には約一時間でいきます。じつは今年四十数年ぶりの祇園祭を予約したところですが、今からワクワクしています(七月十七日には終わっています)。

ところで肝心な関東建設会の近況ですが、やはり会員の増強、財政の確保等の課題を抱えながらでありますが、一歩一歩前進しています。二ヶ月毎の幹事会は盛況で、良好なコミュニケーションの場になっています。私の会長職の在職中に建設会を媒体とした人脈形成、ビジネスへの繋がりを、そんな道筋をつけてパトンを渡したいと思っています。

最後に、立命館大学と建設会の益々のご発展と、会員の皆様のご健康をお祈り申し上げます。



奈良建設会事務局長
宮川繁雄
昭和四十六年卒

昨年、奈良建設会は、皆様方の御協力で三十周年記念総会を開催させていただきましたこと、心より感謝申し上げます。

当初は、昨年の九月三日(土)に開催する予定で準備を進めておりましたが、近畿地方に台風十二号が接近すると、天気予報が有り、会長より緊急会議が召集され十二月三日(土)に延期されることとなりました。その日の内に、総会出席者の方々に電話連絡をさせていただきましたが、不手際も有り反省しております。

台風十二号は、紀伊半島に大豪雨をもたらした。奈良県南部地域の総雨量が二千mmを超える記録的な大雨となりました。

紀伊半島南部集中豪雨災害により被災された皆様に対して、心からお見舞いを申し上げますとともに、復旧復興が一日も早く進みますことを祈念申し上げます。

三十周年記念総会に向けての準備委員会を再度立ち上げ、役員皆様方の御協力により無事に総会を開催する事ができ感謝しております。

総会には、立命館大学より早川清教授・天野耕二教授・建設会より川那部隆二会長・校友会より林幸雄副会長・建立会より大西博会長・京都支部より井上房雄支部長・滋賀建設会より山岡和則会長に御出席をしていただきました。

功労者への表彰式では、ご逝去されました奈良建設会の初代会長の青谷次様の功績が称えられ表彰状と記念品が贈呈されました。総会が終わり、別の会場で行われた講演会では、立命館大学卒業生の丸山章様が「和州郡山城の歴史を学

関東建設会だより



関東建設会会長
江間美久
昭和四十五年卒

全国の建設会会員の皆様におかれま



「ほう」をテーマに約一時間講演されました。

次に奈良建設会の仲谷邦博会長より『台風十二号による被災状況』をテーマに講演されました。

総会が行われた会場にもどりの懇親会が開催され、世代を超えて和やかな雰囲気になりました。暫く歓談した時点で、民謡歌手の大野実佐子が登場されました。日本各地の民謡が歌われ、会場は大いに活気付きました。最後に出席者全員が大野さんを中央に肩を組んで円陣となり校歌を斉唱し、会場の盛り上がりが高潮に達しました。

このようならばらしい雰囲気の中で、三十周年記念総会を終えることが出来ました。

今年からは、新たな一年が始まりますが、四十周年・五十周年に向けて若い方々にも参加し易い魅力のある奈良建設会にしたいものです。

夢を持ち続けて六十年



福岡建設会 小島忠義 昭和四十九年卒

「夢と希望があれば大概のことは乗り越え、実現する事ができる」これが私のモットーです。

記憶にある最初の夢は高三の時でした、進学先やその後の職業をそれ

なりに真剣に考えていた時の出来事です。偶然に観た映画、石原裕次郎主演の「黒部の太陽」が私の進路を決定付けました。自然の脅威に立ち向かい、幾多の困難と戦うあのヘルメットを被った土木技術屋になろうと決心し、劇中の主人公のようになりたいという夢を抱いたのです。決めた大学は土木工学科のある所で縁あって立命館大学に入学しました。

四年後には夢に近づくべくゼネコンに入社し、念願の白いヘルメットを被り、あの時観たのと同じトンネル工事に従事する事が出来ました。その頃から私の中に別の夢が芽生えていたのです。大学在学中から興味があった英会話を使つての仕事がしたいという夢です。十年後には願っていた仕事が見つかったのです、横須賀にある米軍基地での仕事でした。米軍基地での仕事は国内にありながら全ての面で米国仕様でした。使う言葉や図面は勿論英語、安全基準も材料の規格も米国仕様で、日本国内にないが米国内で仕事をしているのと同じ環境でした(私の望むものでありました)。

四年間の勤務を終えればらくすると社内人事で考えもしない辞令の通知でした、工部部から営業部への配置転換です。白いヘルメット姿にあらがれて選んだ道でしたが従うしかありません。とは言うものの建設会社の営業とはどうすればいいか全く解りません。何気なく読んだ雑誌の記事に人工雪の開発という記事が眼に留まり次なる夢が現れたのです。

南国九州に真夏でも滑れる人工雪スキー場を作ろうと。ハウステンボスなど各地のテーマパークに企画書を携えてのプレゼン行脚でした。エネルギーに営業活動を行いましたが残念ながら人工雪スキー場は実現できませんでした。しかしその中で営業とは何かを感じ取り、営業成績も上がり社長賞を貰った記憶があります。

五十二歳で早期退職し、永く温めてきた観光農園(ハーブガーデン)を開園し十年を迎えました。息子達に経営を任せ、現在は最後の夢になるであろう生まれ育った故郷で地域活性化実現のため、市議員として二期目を努めています。

遅ればせながら...



建立会副会長 島田裕康 昭和五十二年卒

夢を追いつけた私の人生も立命館大学入学より始まったと言っても過言ではありません、感謝しています。

振り返ると私の建設会との実質的な関わりは、大学を卒業して三十二年が過ぎた平成二十一年秋からといえます。それは、二度目の単身赴任生活を終え大阪勤務となった私の歓迎会からです。

京都木屋町での有志による歓迎会で、口も滑らかにあった頃合いに、誰かの「そろそろ本題に入ろうか」の発言をきっかけに、同級で同じ山田研究室だった大西君(現建立会会長)の就任にあわせ、私に副会長をお願いできないかと打診がありました。実はそれまで会費は納めていたものの、所謂幽霊会員状態だったことから戸惑いありましたが、断る明確な理由もなく、その場で喜んで引き受けることにしました。

建立会での最初の仕事は平成二十二年一月の第三十八回建立会総会で締め切った三唱の音頭発声からでした。その後、総会だけでなく幹事会や懇親会を通して、若手を含め幅広い建立会メンバーとの交流が始まり、当時UR都市再生機構から関連コンサルタントへ出向中であつたこともあり、仕事の面でも大いに建立会のネットワークを活用させていたことができました。

滋賀建設会の近況



滋賀建設会会長 山岡和則 昭和五十三年卒

その後、住宅都市整備公団、都市基盤整備公団、都市再生機構と時々の社会動向により組織は変わりましたが、住宅団地建設、建替事業、都市の再開発等で設計から計画まで幅広く携わることができ、自分自身の成長を実感できる充実した時間を過ごすことが出来ました。(定年の挨拶までは少し時間はありますが...) 現在は三度目の本社(横浜)勤務となりましたが、建立会の活動には可能な限り参加していくつもりです。我々技術者には震災復興にむけて、今以上にあらゆるネットワークを最大限に活用し、個人及び組織として期待に応えていくことが求められています。建設会はじめ同窓の方々の益々の活躍を期待しております。

滋賀建設会(建設会滋賀県支部)の山岡です。滋賀建設会は、官民あわせて約二百五十名の会員からなり、年一回の総会懇親会を開催して、幅広い会員の皆様の懇親を図っています。立命館大学びわこキャンパスの世代にも身近な会とするために、昨年に名称を滋賀衣笠会から滋賀建設会に変更しました。そして、若い世代の会員の参加を拡大していくのが大きな目標となっています。私が就職した三十数年前は、私の職場に滋賀衣笠会の事務局もあり、新採であつた私は仕事は半人前でしたが、滋賀衣笠会事務局の手伝いは一人前にするよう鍛えられました。そして、総会懇親会に参加するのは当たりまえでもありません。その後時代も変わり、建設界を取りまく状況も大きく変化し、同時に、滋賀衣笠会(滋賀建設会)の状況も大きく変わってきたと感じます。

先日、若い会員から、「官民合同の滋賀建設会を気遣ってしまい、参加しにくい」との声をいただきました。これは、昔からある永遠の課題と思っております。昨年、滋賀建

設会の職場支部と称して、職場内で年代を超えての立命土木系の同窓会を企画したところ、滋賀建設会へは参加のないような会員も含め、二十名からの若い世代が参加してくれ、卒研や昔話に大いに盛り上がりました。若い世代にも、改めて年代を超えた同窓会への期待があると強く感じました。この期待を、官民合同の滋賀建設会になんとかつなげていこうと、一つの目指す方向を見つけたと感じております。

こんなことを、滋賀建設会の事務局の仲間と話している頃、六月二日に、大同卒研の同窓会が十数年ぶりに開催され、全国から朱雀キャンパスに三十数名が集まりました。同級生の懐かしい再会だけでなく、年代を超えた方との初めての出会いもあり、大変楽しい同窓会となりました。幹事様大変お世話になりました。ありがとうございました。また、私が直面上でおります課題、「官民の壁を意識しない楽しい同窓会」とするヒントも、この大同卒研の同窓会で見つけることが出来ました。大同先生には、二次会までお付き合いをいただき、楽しい出会いと、先生のお元氣なユーモアあるお話を聞かせていただき、大きな元氣を頂きました。本

当にありがとうございます。また、近畿各府県建設会のネットワークが、滋賀建設会のさらなる活動への刺激にもなっており、同窓会である建設会の魅力を大きく感じており、若い世代に胸を張ってPRできそうです。さらなる滋賀建設会発展の希望を話させていただき、近況報告とさせていただきます。

関東建設会と私



関東建設会 稲田政美 平成元年卒

私が関東建設会に縁を持つてから約五年になります。それまで校友会にも学部のOB会に出席したことがなく、集まるといえば所属していた体育会ソフトテニス部の同期と数年に一回顔を合わせる程度でした。そ

もも自分が知らないOB OGの集まった同窓会に何をしにいくのだろう?と感じていましたので同窓会に対するイメージは、あまり良くありませんでした。

ある日、当時同じ研究室だった一年先輩の方から、関東建設会にお誘いいただき当時は断り切れずに参加したというのが、事実です。参加した総会には五十名程度のOB(案の定OGは一人もいなかった)がお越しでしたが、お声掛けいただいた先輩以外には誰一人と知らず、ご年配の先輩方に対して自己紹介の繰り返しでした。しかしながら、お誘いいただいた先輩が本当に献身的に私を色々な方にご紹介いただいたのでその姿に感謝したことを今も覚えています。

その後、幹部会や若手会などにも顔を出すようになり、参加している方の名前と顔が次第にわかるようになってくると、打ち解けると共にチームの意識が出てきました。建設関連の会社の方が多いので談合や仕事の回しあいなどのイメージがあつたのですが、今ではそのようなことはなく(私が知る限りでは)、どちらかという自分の仕事上で困ったことや相談に対して役に立つ人を紹介しあつたり、情報を交換するということ場になつていっていると感じます。

世間では私ももう若手という部類に入らないですが、関東建設会においては平成卒業生が少ないこともあり、まだまだ若手としてやるべきことが多いと自覚しています。幸い会長がポジティブマインドをお持ちであるためである意味幹事のひらめきのアイデアがあつても総会や食事会などで採用いただいて実現しています。今年の総会は、今までの事務的な総会と異なり、浅草のミュージアムホールを貸切り津軽三味線のアーティストをお呼びして会を盛り上げ、ご参加者に喜んでいただくという企画をしています。

まだまだ人生の集大成に入るのに少し早いと思ひますので、まず自分の所属している関東建設会を通じて縁作りをさせていただきます。関東建設会のキャッチフレーズ(今年の幹事会で考えたのですが...)でもある。後輩に伝えるべき事を伝え、お

互いに支え合いながらもほっこりする同窓会。を目指してがんばりたいと思います！

立命館大学で学んでよかった



建立会
小島真理
平成九年卒

社会人になって早十五年が経ち、無我夢中で遊び・学んだ衣笠CやBK Cでの学生生活、西京極テニスコートでのサークル活動、今思えば懐かしく感じます。

卒業後は、何気に入社した建設コンサルタンツ会社で、主に橋梁関係の仕事に携わっております。

入社二、三年目の頃は、忙しさのあまり、挫折しそうになったこともあり、五年を過ぎると責任ある立場で仕事をしようになり、今ではインフラ整備というスケールの大きな仕事に携われることに喜びを感じております。

私の建立会との出会いは、ちょうど三年ほど前、会社の先輩に誘われ建立会総会に初めて参加させて頂いたのが切っ掛けでした。

それを気に、母校の様々な先輩・後輩と出会うようになり、今では、他愛無い話で盛り上がり息抜きできる場であると同時に、刺激を頂ける貴重な場になっており、「立命館大学で学んでよかった！」と感じております。

立命館大学での四十七年



立命館大学
特別任用教授
尼崎省二

一九六五年四月立命館大学理工学部土木工学科に入学、一九七一年三

月大学院修士課程修了までの六年を学生として過ごし、同年四月立命館大学助手に任用されて四十一年が過ぎたこの三月末に定年を迎えました。四月からは都市システム工学科所属ではなく理工学部所属の特任教授として、教養科目を含む通年平均一週四授業時間を担当しています。

私が高校生の頃は、一九六三年の名神高速道路(尼崎-栗東)開通と黒四ダム完成、一九六四年の東海道新幹線開業と東京オリンピック開催など、社会資本の充実が盛んな時代でした。このような時代背景に刺激を受けてか、土木分野で仕事をしたいとの思いで土木工学科に入学しました。四回生の卒業研究は明石外世樹先生の材料学研究室に所属し、衣笠キャンパス内の等持院墓地と衣笠の道の間にあった土木工学科第二実験室(俗称「山の実験室」)を中心にコンクリートの衝撃疲労実験をしました。この研究で疲労実験定数とも衝撃力を波動観察により測定したことが後年の超音波法の研究につながっているように思います。

助手に任用された同年に児島先生が助教授として赴任され、材料学研究室とRC構造研究室が材料実験室を利用することになりました。材料学研究室で卒業研究を行った同級生十七人、修士課程二年間に特殊研究を手伝ってもらった四回生を含め、在職四十一年で卒業研究をともにした学部学生は総計四百十人余になり、大学院修士課程で研究を指導した学生は二十九人になります。

六年間の学生生活で培われた人間関係、十一年間の助手時代にコンクリートに関係している諸先輩および建設会を通じた土木工学科卒業生の皆さんとの交流、さらに京都大学材料学研究室のゼミに二、三年参加させてもらいゼミに対する心構えが身についたことなど、多くの人々と交流できたことが立命館大学での研究教育の礎になったと感謝しています。因みに最初の土木工学科卒業生との交流は一九七三年十二月の、いのしし会(私の生まれた昭和二十二年に卒業された先輩の集い)でした。

伊藤敏一先生が定年退職された一九八二年に助教授に任用され、設計研究室を担当することとなり、

一九八八年には研究室名を研究内容に合う材料計測研究室に変更されました。一九八四年四月から内地留学制度を利用して京都大学工学部研究員となり、同学部土木工学科材料学研究室において学位論文をまとめさせてもらいました。恩師・明石外世樹先生が一九八八年一月胸腹部大動脈瘤破裂のため急逝されたことを公務主張から帰宅して聞き、仰天失語したことを覚えています。

一九九一年八月からのパーミンガム大学への留学では、京都でのアルカリ骨材反応の国際会議で一緒したL.A. Clark教授の世話になりました。一年余を家族揃って英国で生活しました。研究テーマは「鉄筋コンクリート柱の強度分布のリバウンドハンマーによる推定」でした。

研究活動の大半は、コンクリート構造物の非破壊検査による品質評価方法に繋がっていました。標準的に施工された構造物でもコンクリート品質は、通常、供試体よりも劣るとともに締固め程度と養生方法により異なることから、構造物コンクリートの品質評価方法が確立されることを期待しているところです。

着任の御挨拶



建築都市デザイン
学科 教授
持田泰秀

今春から、建築都市デザイン学科に着任致しました「持田泰秀」です。専門は、建築生産・建築材料・建築構造です。これまで、二十五年間の建設会社での構造設計を中心としたエンジニアの実務と、二年間の国立高専での教員の実務を経験してきました。エンジニア実務の特徴は、オリジナルで開発した技術を、まずは実際のキーになる建物に適用させ実用化させていく点です。例えば、「国立西洋美術館本館免震レトロフィット」での、日本初の免震化建物実現のためのアンダービニングに関係する技術開発。「赤坂二丁目計画」での最終的に日経優秀製品賞を受賞した「サイドプレート工法」による、大地

震に耐える制震構造建物の実現。一品生産である建築に、個別技術を開発し実用化させ、それから幾つかの建物実績を蓄積し、最終的に汎用性の高い建設技術に完成させる。建設業界では代表的な技術開発の取組み方で、最初のモデルプロジェクトで相当の開発技術を実現させるので、開発費用の面で効果的な運用が可能といえます。

教員の実務の特徴は、学生との距離が近い中で教育を進めてきた点です。例えば、施設面での影響が大きいです。例えば、教室で学生の顔が良く見えて対話が出来ると時間が持たたこと、テニス部の顧問活動や学生寮の管理活動など生活指導に関連する教育を進めたことがあります。正直なところ、この様な身近な教育活動は、研究や技術開発とはリズムが相当異なるため、気持ちの切り替えや時間の使い方で苦労した記憶があります。

プライベートでは、これまで関西での活動が無いため手間取っておりません。出身は福岡で、建設会社の十年間程度は、「越の国」いわゆる福岡・石川・富山・新潟と大和の国からは、「白山連峰を越える」魅力のある地域で活動しました。

その中で立命館大学建設会の方に大変御世話になったことを覚えております。本原稿を作成するにあたり、事務局の方から参考にと立命館大学建設会会報を頂き、その内容を拝見しましたところ、偶然ではありますが、私が大変御世話になりました方の「会員の声」が記載されており、御元氣そうで安心致しました。

立命館大学に着任しましたのも、一つの御縁であり、私のオリジナルの経験を研究や教育を通して、お役に立てればと考えております。今年の夏休みは、研究・社会貢献の一貫として、学生と一緒に東日本大震災の仮設住宅の調査や、新潟の打放し建物のひび割れ調査を行う予定です。最後になりましたが、これまで御世話になりました立命館大学建設会をはじめ、多くの諸先輩の方々に大変感謝しております。その意からも現役最後のラストスパートを立命館大学の若人のために活動する所存です。今後共、宜しく御願ひ致します。

事務局より

お知らせ

■会員登録データ

立命館建設会会員の皆様の名簿を隔年発行しておりますが、そのもとになるデータベースは、皆様からのお申し出に応じて適宜更新しております。このデータベースは、年会報の送付、総会などの各種案内、また、各支部からの連絡、会費請求の事務などに利用しております。

今回送付いたしました年会報に同封されている「会員登録データ」文書上段に記載されているデータをご確認いただき、修正や変更がございましたら8月末日までに建設会事務局までご連絡下さい。

また、今年12月初旬に「平成24年度版 建設会会員名簿」を発行予定です。

会員名簿は、会費を納入いただいている会員を対象に送付させていただきます(2年に1度の発行ですので、平成23年度、24年度分の会費納入者、ならびに終身会員に送付させていただきます)。

なお、平成23年度分の会費をまだお納めでない方は、同封の振込用紙にて2年分の会費(平成23・24年度分:6,000円)を納入いただきますと、発行と同時に名簿をお送り致します。

■建設会年会費ご納入のお願い

立命館大学建設会は皆様の年会費で運営されています。

2012年度会費のご納入をお願い致します(年会費:3,000円)。

また、会費ご納入につきましては「郵便局の自動振替システム」をご利用いただくこともできます。申込み手続きは簡単ですので、すでに多数の会員の方にご利用いただき好評をいただいております。お申込みの際には、取扱郵便局「草津若草郵便局(Tel: 077-567-4050 FAX: 077-567-4120)」へ申込書の送付依頼書(様式適宜・住所氏名を記載)をFAXにてお送り下さい。毎年10月1日に会員様の郵便貯金口座から年会費が自動引き落としされます(8月末以降のお申込みは、翌年10月1日からの引き落としとなります)。詳細については、郵便局から送られてくる申込書に同封されます。

なお、銀行からのお振込も可能です(ゆうちょ銀行109(イチゼロキウ)支店、当座0000884)。お振込の際、お手数ですが氏名の前に10桁のお問合せ番号をご記入いただくか、お名前・お問合せ番号・お振込日を下記アドレスまでご連絡下さい(振込手数料は申し訳ございませんが、ご負担願います)。

建設会事務局

〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1
立命館大学理工学部環境都市系事務室内(担当:山元)
TEL: 077-561-4911 FAX: 077-561-2667

http://www.ritsumei.ac.jp/se/rv/ob.html
E-mail: kenstkai@st.ritsumei.ac.jp
会費払込郵便振替口座: 02 大阪 01080-1-884